



參宮名將圖會



淨勝寺宮名所國會附録

目録

△長等山 長等山 希山中

△三井寺 岡山教待の寺 寺門境畧 祖寺 中真祖智徳

大師寺 小院 後若明津 南院正法寺 札不親着

地蔵堂 三重塔 莫不動堂 又社并相殿 三柵栢 河新川 龜鳴橋 龜ヶ岳
・文殊過 多良水 尼ヶ池 子園子 十八神 金堂 圓伽井 月見池 姦名腫 村
雲捨 新橋 古橋 希儀 及古の寺 食寺 希子偽禰 廣広堂 經堂 崩井 庭
・菖葦泥羅 女人三母情 三院三後者

五別所

△尾苑寺 茨城阿闍梨墓 一持三面佛 楯尾八藏 源八社

△微妙寺 明王堂 美師堂

△迎松寺 如來堂 文持佛 燈名号 獨振水

鐘樓 菩提樹 安持和尚石塔

△常在寺 水觀寺

△湖水 月磯碕 竹生碕 希松室 仲基仙童 琵琶の寺 多系碕 仲ノ碕 水葦
園 礪山 松原碕 長命寺山 八幡山 黒津 白石 支那 志の寫

△湖中船

△月魚

△月言

△湖上月土

△月産物

△月洲寄

△月瀧

△月山

△月八景

△月神社佛圖

△古城

△月燕墓

△**日人物**・佐々木・沙井・蒲生・織田信長・吉園秀吉・傳教大師・源治貞宗・大石玄良・小村季吟・僧元政

△**後丸をま回** △**余五湖** △**錦織里** △**志賀故郷** 赤塚

△**志賀山城** △**貫之祠** △**黒主祠** △**志賀山中城趾**

△**志賀寺舊趾** 希上人の跡 △**穴** △**志賀水**

△**弟松院旧趾** △**芝葛原** △**坂下** △**日舊都**

△**十王堂** △**明智寺** △**大権視神廟** △**滋賀院** 慈眼大師廟 三佛堂

△**柳宮**

△**日吉山王七社** 希 攝属十四社・末社・菴禿倉希於臺
 ・衣掛石・佛院・七核和歌・白臺院石窟・湊石
 ・夏妙幢・御石・明星水・元三大師堂・大政所

△**日奈津** 柳還神の列列 希 御輿振・七本柳・松中湊 日三ヤ
 落一等の細記

△**両社明神** △**明智城趾**

△**唐寄** 日明神希 孤松の古記・日後・山王松中供神

△**西教寺** △**比叡过** △**来迎寺** △**苗** 藤

△**雄琴里** △**望田** 希多漢・神酒浦・鶴ヶ池・神津・山洋瑞寺
 湊月堂・子持佛・観音堂・衣川・天神

△**美野入江** △**和尔** △**比良山** 日獅子岩 △**小松湊** 揚梅

△**獲岩** △**白鬚大明神** △**抄下里** △**大溝**

三井寺開山教待

天智天皇遷都の後佛刹建立之
齋意ありてつとむ末その

勝地と得給はば二月三日

此夜の若く乾潤をば

て雲區と奏とと見え

孫小室と申して村を

大石川忠茂等

勅して芝を括披せ

りふ山中瀑布の傍に

優婆塞なる梵涌口

石盤向へともそふるは

其容止見らるの者みわ

足必乃まはるるべし

多几い帝愛ののそを

せよびく即其のに終

ありまきく大友の

命ト



精舎を建立し給はる
崇徳寺と
つとむ末その
齋意ありてつとむ末その
勝地と得給はば二月三日
此夜の若く乾潤をば
て雲區と奏とと見え
孫小室と申して村を
大石川忠茂等
勅して芝を括披せ
りふ山中瀑布の傍に
優婆塞なる梵涌口
石盤向へともそふるは
其容止見らるの者みわ
足必乃まはるるべし
多几い帝愛ののそを
せよびく即其のに終
ありまきく大友の



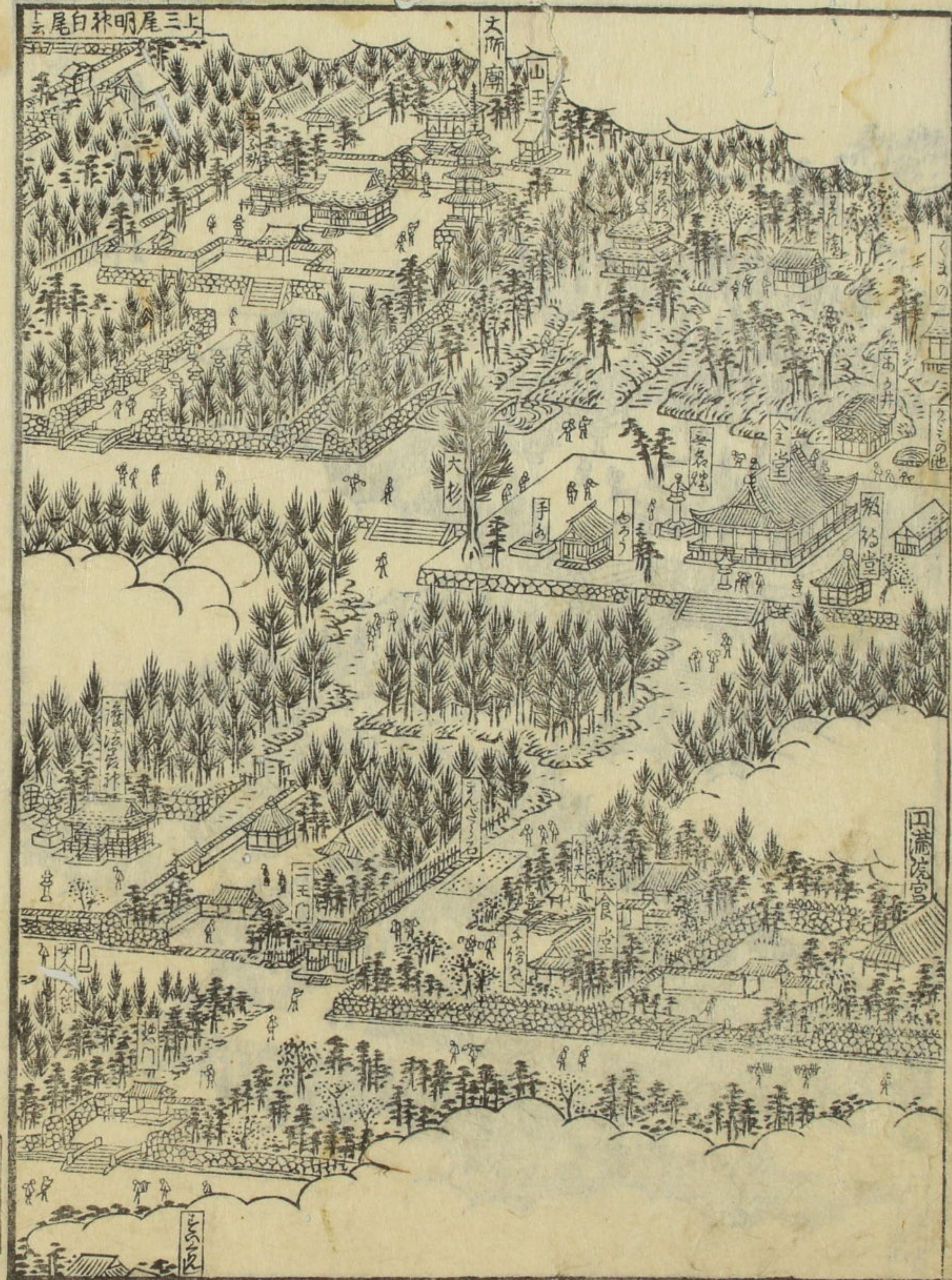
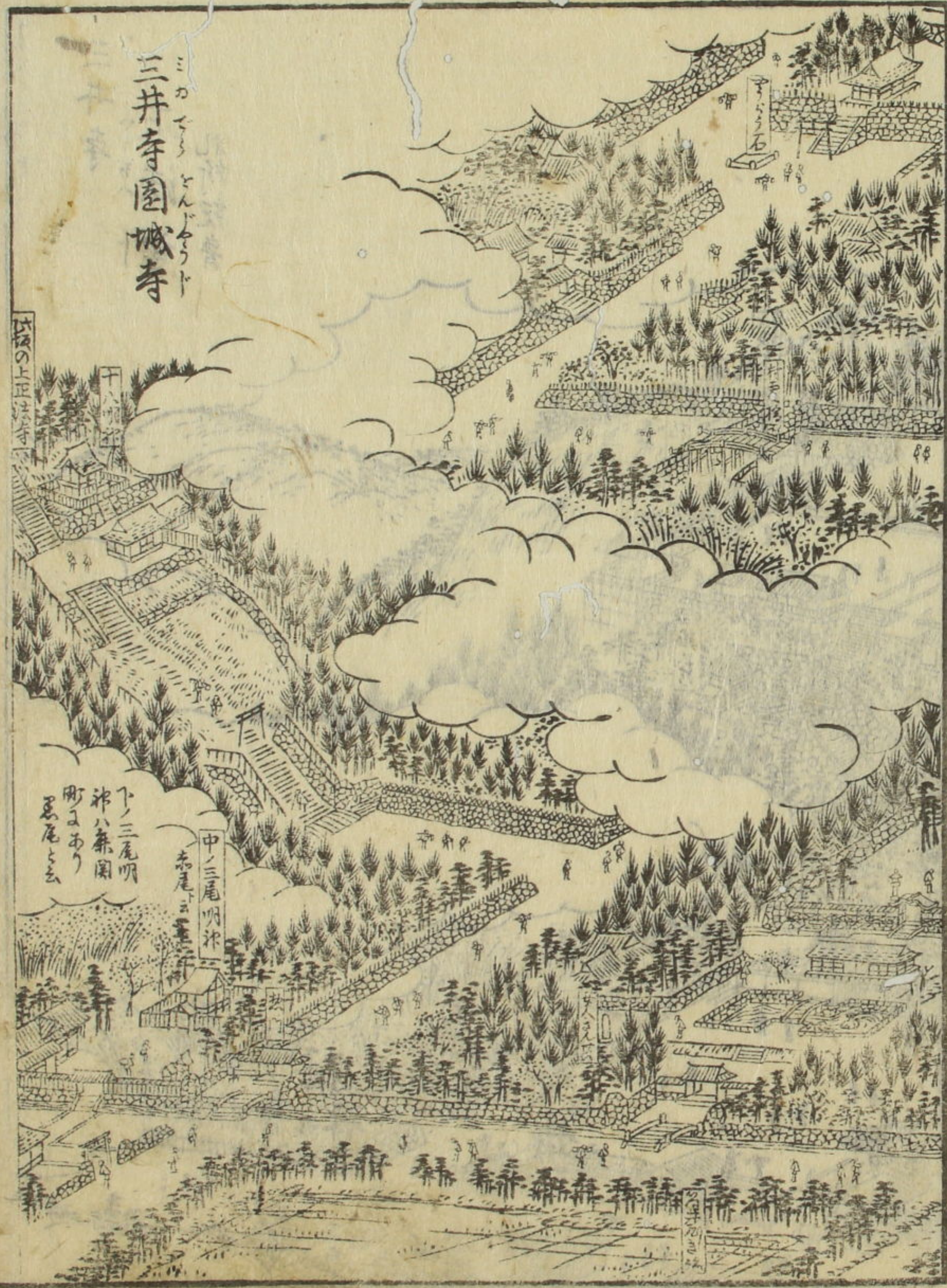
三年寺
新羅明神



安永堂
三門

○祖堂

同基の祖堂の後の後あり入定の地とも云の傳曰優婆塞教待居士
 の伝國の人にも志は久しく園城寺に居住して事おも不食附湖邊に
 出く負籠を釣とてりしととさきど同基の寺の地園にもありて此等も多経
 り百二十多經も寺門と園城に附屬し音振して跋跋公扉く其石室は妙なる
 負籠の青巻く蓮と化ししなり
 三宮感慈録云佛師子園田市の傳は所跡陀魚
 聚りて埋む不号けて無の園とも又曰録甲香餅は無り園聚と其地は龜
 鳴樹あり教待志を志を日とる博姑村の教愚の小道士ありて心跡の別あり
 徑より教待三年寺より其別ありて路東心の林をさるるよ本之後の御若若
 集城道の顔ありあり今も今も其名瓜地今谷をククキ
 毎年十月十日祭あり
 ○智證大師堂 中興開の祖の大師尊像 智辨曰遺骨と納むことと唐浣
 とのふまは宿坊香養坊智證の園城の謚之大師の和氏ありて後及那珂郡の
 人之父の宅成母の佐伯氏弘法の為みの出かり弘法多の隆起めく眼も重腫を
 視し天竺聰教幼はして老成の量あり時々金倉寺に於て或夜天女来りて
 智証大師は落し其時年八歳父は索て因果經と讀んで志を悟て以誦と
 十歳ありて葩經魯論史文選を讀十にありて瓜瓜祥し治りて後真と師と
 志く事ふ十九ありて蘿燈一山に棲り一紀十二年
 仁壽三年秋八月九日偶唐
 の商人飲良暉は便取して海に流ぶ此年
 掉の致也





のつれに記して行身ぞりくくの神も佛も我とこそなり 園珍

分十八日唐の苑前福忍界と云く大中九年長安善徳寺に入り興善寺三

善見悉く法義を一遍と 同十二年其又商人夢見若

書者之他心此抄いく勅して唐院を園城寺と云く唐宗の佛像經籍佛會

初大日合の冠銀の芝鞋灌頂の具叙迦舍樓の如法法雲多城安並して

延曆寺の唐皇と云く徳蓋厚く王法の師範と云く寛平三年冬十月

九日寂と竟山叡山南谷と云く其遺骨を唐坊に納め延長又年冬十月

智澄大師と云く諡と云く智徳入唐の時日記りて書を撰く其書を以て彫刻し

黄不動と云く師の廟 智徳入唐の時日記りて書を撰く其書を以て彫刻し

三重塔と云く師の廟の在りたる 智徳入唐の時日記りて書を撰く其書を以て彫刻し

五社 新羅明神。三尾明神。護法菩薩。新宮権現。十八神

新羅明神は小院現在台の礎屋に祭神素盞鳴命本地主神素盞鳴命

又十猛神と師て新羅國よりある園城寺の神其神中の教籍と擁護し

て此朝へより三耳寺と云く此を以て新羅と云く明神定み

現在と云く此は現在台と云く 永正七年

秋九月明善始て祭祀を今も九月廿一日佐竹家より供物あり

新羅より三耳の流と云くきて歳以位へ三神の云と 兼邦

相殿。般若。宿王。宿王。宿王

三柵板 明神の垂を垂と云く 宿王 宿王 宿王

後冷泉院の御付世間といへり 宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

宿王 宿王 宿王

外郡兵衛府生時重を伴う六衛府のいとも社を造り、神靈會の
たり祇園の中ろをいつる

龜鳴橋 ○龜が園 のまてり

万代より代をうさのいのうる龜のまてり松とどり

式部大夫 實業

此龜が兵衛後冷泉院の時大嘗會所原近は國龜が丘の松の樹まてり三畫記之は三井寺在
父殊が過 ○安樂堂 樹をういて人の後まてり其の木のまてり

三尾大明神 南家琴緒の孫まてり再建 ○恒根 ○俣井諾 ○日雷女

これを三尾の神とて又白尾の尾者尾と稱まてり此神三尾の白蛇をまてり

但と丘と神柱の石あり天人降りて琴を弾くまてり琴緒がまてり

毎年三月中の卯これをまてり又別は三尾と稱まてり ○琴尾岩 ○筒井岩

白尾 ○鹿岡 尾

護法若神 中宮の孫守まてり又尾護法若神まてり

西方の英人かりり又護法産後まてり

龜が池 二門の間にあり若神尾

又園子 毎年 四月 此若神の神傳をいらきて法味が薦い又諸人園

○新宮権現 新出村の権現 又月又月神まてり乃山王権現之天安二年 智院新羅

ふまてり其寺まてり新羅宮まてり山王の敵山まてり

新白の地は社分まてり寺記曰天喜二年 因満院明る此宮をこの藤ま

遷しおと固て其巷をひて神出村まてり又改めて新宮とて旧社の地今知

者少し又智院の廟の後まてり山王権現の

○十八神の南谷竹の孫守まてり伽藍の守護神之是利まてり已上五社

熊野權現 熊野の権現 傳曰平治元年 長更元大僧正の勸法

○位者大明神 小院の孫守まてり又永又奉 淨辨僧正の勸法

○金堂 關伽井の源 本寺 孫勒佛 南の間に面長其息女 智院安著天親の二喜

其長一丈六尺 長一丈六尺 二推古天皇勸佛 長一丈二尺 三尊武天皇の應制

道長の本尊銀の像 長七尺 六の天職冠おまてり

○關伽井 三井是之金堂西階の地まてり合申まてり又九段の龍を河渡とて

旧は畫圖を覆り園内の鏡板龍の画に法眼破風の蛇尾其又帛 關伽井淨水の梵



村雲橋

三舟寺智光大師此橋の上より
 のりて西去大佛刹の回縁を
 参り即西方に向て深水の
 印を踏み給へん忽一燈の光
 照りてまきく西方に靡き
 其後信の福言を
 同縁の強雨のさうり
 遠く消滅せり



○月見池 ○鐘の池 昔より三舟の傍あり
無名池 天智天皇此基址平均の時彦光也即其石を求むるに

の宝釋又其の白石を得るを帝太子の無名指を將てしるに
此鐘石壇のり埋納むるに無名池と云ふ此鐘石壇のり埋納むるに

○右鐘 金剛の傍に在り此鐘御龍宮より移るを平記の文に西の上は去るに
此鐘の傍に在り此鐘御龍宮より移るを平記の文に西の上は去るに

○新鐘 金坐の傍に在り此鐘御龍宮より移るを平記の文に西の上は去るに
此鐘の傍に在り此鐘御龍宮より移るを平記の文に西の上は去るに

鐘の記文三曰 諸持蒙十方檀那助成修造江州三井寺之堂社狀
伏惟阿難尊者傳持佛法承宣釈尊教勅為濟度衆生也優填王刻如來尊容

亦任金口之附屬為利益國家也抑當寺者天智天武持統三代勅願之精舍
教待和尚草創也天台真言俱舍三宗兼學之練若智證大師再興也有八功
德之水和尚修吉龍王所攝矣為無熱池之流奉天子御產湯焉依之玉鉢無
恙敷運無煩自稱三井寺佛法繁榮日尚矣於此乎生身除勤降自都率結
三會值遇之緣天竺名鐘出自龍宮鎮唱諸行無常之理借考古記温來由須
達長者建祇園精舍十大弟子鑄四方梵鐘今此寺之鐘其隨一者乎或時顯金
胎兩部諸尊或時現三世諸佛相好加之天下有凶年則汗流霽瀝民間謳太
平則音澄響高傳度聽鐘聲永免三惡苦熱人運步何輩不拜之就中吾
大師者大聖不動變作盡真言上乘密義救世觀音示現窮天台法華淵源平
刺准釋尊若行攀大嶺葛城之嶮岨覓役優婆塞跡司熊野山之檢按障者降
伏之勒矣矣拓福之祈靈驗追日新法威無落地矣然問四海安全併任三井
懇祈王法長久偏依大師法德寺門名譽不可勝計者乎唯恨建武之昔燒失
七百餘宇為凶賊都為焦土曆應之古造管一百有餘亦為雨露類毀悲歎無
限愁鬱幾計矣爰某忘躬不堪捧一紙化書意馬急鞭敲十方檀門信心貴賤有焉
則布千金万斛道俗尼女無焉則施一紙半錢宛如不厭巨海於万流顯等不
嫌大山於片塵若夫脩造功畢結緣隨喜群類現世安穩而者千祥万吉自由
自在渴仰皈依縑素後生善處而者三身萬德無邊無窮都而自界他界有緣
無緣親疎遠近平等普利仍勸緣之趣蓋以如斯

○食堂 二王門の中を釈迦如來 天子代々の御位牌は事と納む

○父僧の精舎 佛の傍に在り此鐘御龍宮より移るを平記の文に西の上は去るに
此鐘の傍に在り此鐘御龍宮より移るを平記の文に西の上は去るに



儀^{たつ}後^ご古^こ秀^{しゆ}郷^{ごう}
 獲^と十^{じゆ}種^{しゆ}家^か
 於^お龍^{りゆう}宮^{みやう}
 三^{さん}井^{せい}寺^じの^の毛^け虎^こ陸^{りく}
 如^{ごと}十^{じゆ}種^{しゆ}の^の其^{その}一^{いつ}也^{なり}
 ころり

○護摩堂 中なる不動明王之日如來 ○二王門 將軍家の御寄附あり
○門外又大改あり 三井寺の門より三井の二王や本三 芭蕉
其角

○徑堂 一切経を氏乃軍寄附 一洗の唐の六に題元 ○筒井乗明を法
二王門の系熱門の内外より其山の森の中より 敷蔓陀羅 二王門の内を
其角の水よりあり其石の筒井谷より

○女人三井詣 七月十八日詣り 深谷の后より 其角の二王門より入り
如玄輪観音 南院に法 西園十に番のれ所之六月十七日此れ焼あり 梅檀木の
像 長又尺二 智光大師の作之を唐より刻しる像を此の唐佛といふ本
堂右の山麓の瀧のうらみありて 攀るる險より又文明の秋此處を遷

せり山上望湖臺あり湖上の二層吟嘯遊戯の境一洗云云此観音を
義晴御所を末代に宛たり構へ地蔵堂 ○塔あり又たりの方に板を
の小山又天神社又観音堂ありを奥の院といふ此の奥院を東洋
に俗の曰これに護法の末寺とて系本を 毘沙門 毘沙門の自然石三ツあり

○三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ
とらひ寺門より 實相院 圓滿院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

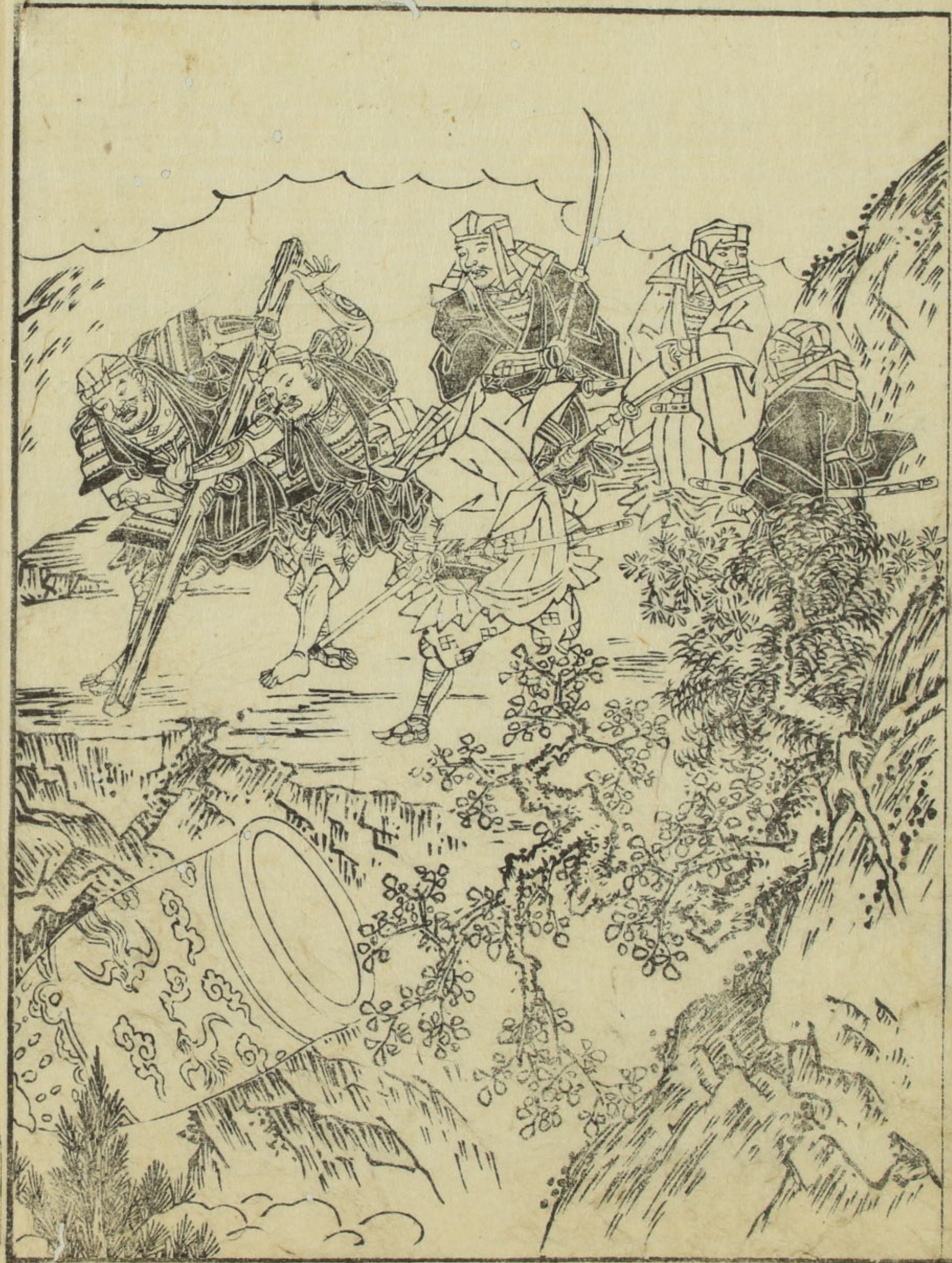
三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

三院の 實相院 院北 聖護院 院中 圓滿院 院長更に何とも 親王方へ

えん
山門の衆後三寺の
鐘を奪ひ無御寺の
中へ擲げんと





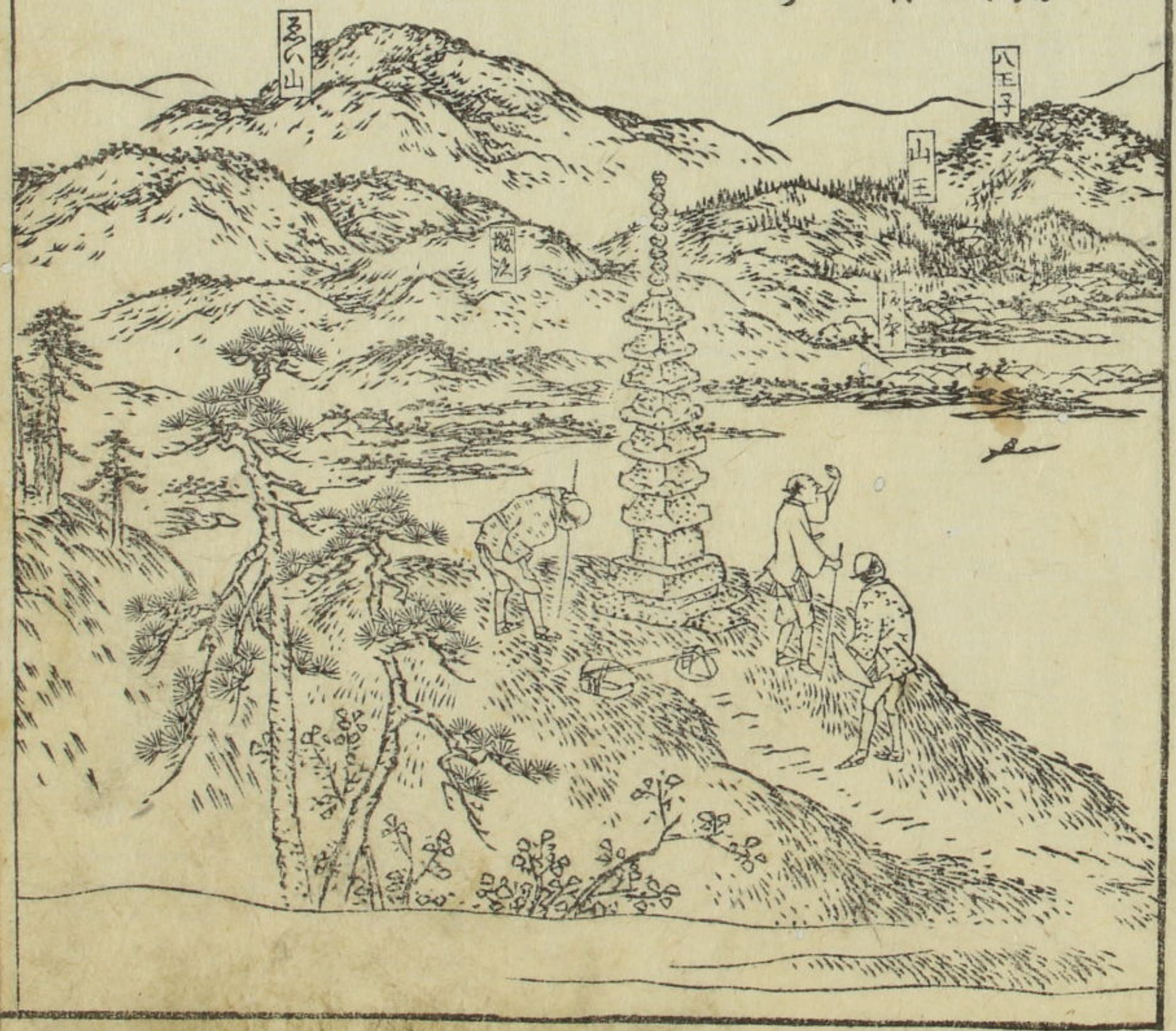


道松寺山頂安塔塔
湖上屋をの英景

見ゆると林麓の大津の里の山を仰いで
 見るより此里の一園を眺むるの景
 をのべたるはなほよく相板を
 首に足すして膳石場とて
 左の巖の傍とて尾末の沖を
 のまむにさく尾末川を右の
 留とてなり左は首末の
 日吉比良の根を始とて
 巖田若宮傍唐橋の洞橋
 左は天の橋とて幾多も
 かなづらうかおと海にひく
 瀬とてさるるごとく其上に何れあ
 物舟をてらりかふれよや
 と同じあやかりなるく見
 中ふくく海の浪りに
 現代列くくくく



まげ沖の橋多き舟長余も
 九心橋の波多き舟のしり観る
 とてくまは橋と三と心合ふ
 原塚山合勝とて向ひなり甲賀山
 田上伝をたれ顧るやわて其
 中をくくくくくくくくくく
 とくもあつて武財のあか
 震ふゆゆい且つられ且
 かくれ竹生橋をたれ
 きててらりく浪向
 海にひくくくく
 とくくくくくく
 其百の一や
 けん



後入の余跡を継ぐる火燧の城を攻て軍制をたしも全くは非の守護

○抑此仁堂の琵琶と申り青興福寺僧都の弟子松室の仲算とて受生あり
密く津戒を拵り本附一人の思齋と申り同宿を執りて法華經と讀誦とい
きき密齋と申りこれ仲算を念して修業を怠るみ三ヶ年を経て八月
十又夜の時夢で修業を怠るみ仲算を念して修業を怠るみ三ヶ年を経て八月
未むある付法會のときよ若野の奥み入るが此石巖をく待てうん思
齋の意よりかたふだれ初とて心ひく推老を依て事を激し推老言て曰
されば去年此奥に經讀の音ある所たどりし石の上み松あり此下に思齋
ありて奇形妙なる振いあり人衆を驚かししは此の形をたしめり
仲算大に眼に推老のありて付て其石を攀りて其形をたしめり
竟といひて仲算をたしめり三室は祈誓し永く體を守り思
ありしは此思と申り天にわぶとて教とくかか思忽と申り
凡師坊が有縁の恩を謝して遠く又別と申り鐘と再びありて曰我毎
年暮春十八日又百の群仙と江及竹生修業集りて三箇日須臾會と
今年此琵琶の後と申り其の禪房其の琵琶をとり終ると云終りて其の
仲算其妻を遺すと三月十日の夜極の光に琵琶とて香をたしめり

所名 所名 所名

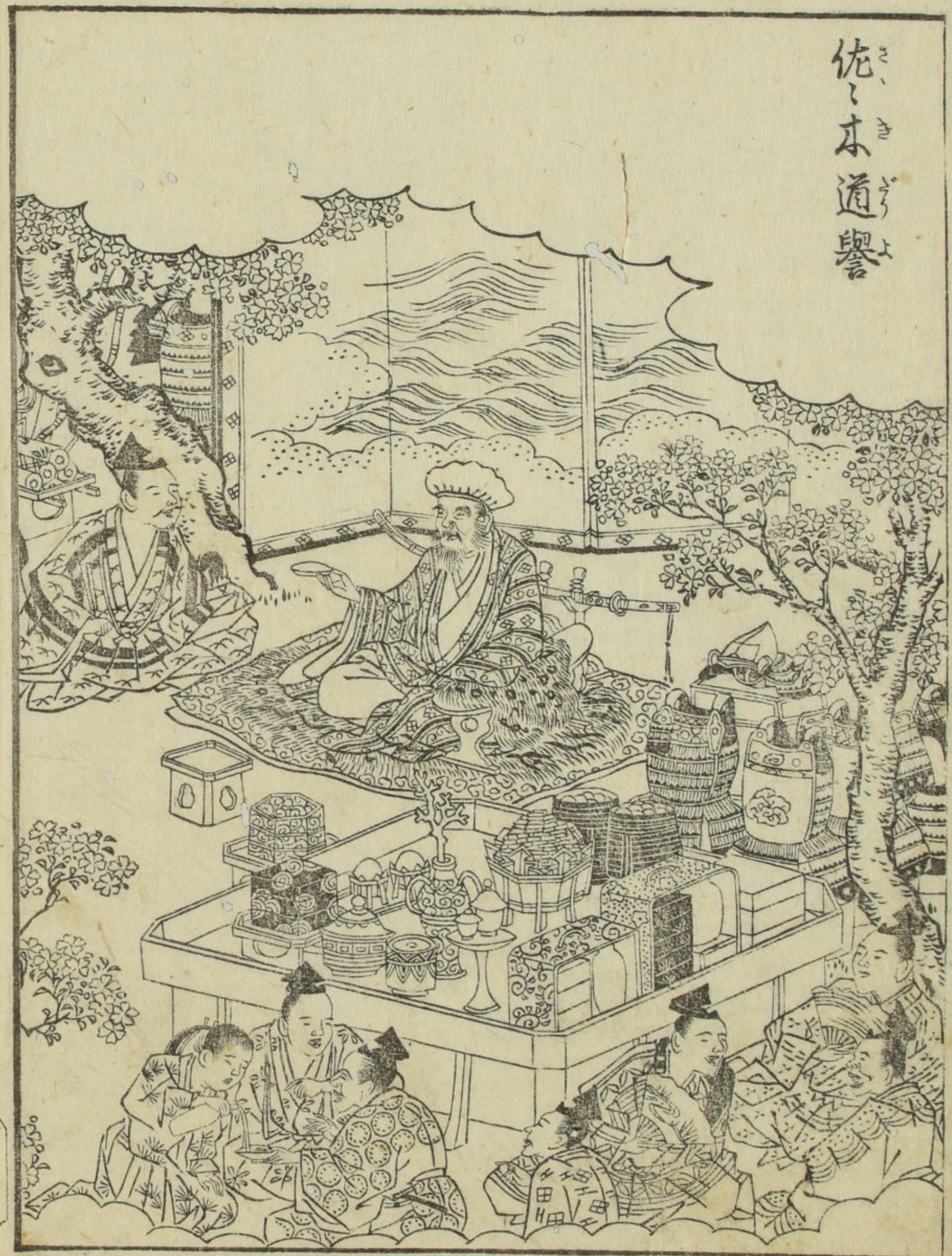
- 竹生修業の十八日の源より松を沖の波に浮り眼と戴いて櫻雲を
守る採雲と申りて天より星馳望致すみ茶海波のうかくと
と竹生修業をたしめりてぬ是よりて此琵琶と申り終りて
○ 多景 竹生修業の去之見齋と申り法華宗の寺あり縁記草山集
○ 水荳園 八幡の牧より入るあり牧の者此に修業又園と申り
○ 磯山 磯の内の松根と申り磯の松と申り松原崎と申り
○ 長命寺山 長命寺と申り西園三十二番の九所と申り
○ 八幡宮 八幡の細いと申り
○ 白石 松本より三里許りに石待り水際より三ヶ所ありて
○ 松原崎 松原崎と申り





三つじろのちんじん
松室仲算
せんごうとちんじん
慕仙堂





去く源の婿の婦人曰く兵庫助成の近江佐々木の荘に位居りたり秀
朝光より又世の孫之保元の乱に義朝は後平治の乱に悪源を義平に属
と謙田政教等と十六騎平重盛が又百騎を破る義朝卒とらん及んて秀
義の近江に還り居り居り罪て困窮に抑ふに御つとて深奥に赴く踏浪谷
莊日平重國がまた驍勇を率いて婚と居り義法誕生て此日平を經方
源朝知伴を國に流されり及んで息定綱を綱をて去る所同くして
絶ど朝知伴兵隊が及んで及んで近江國甲斐に居りて大原の莊に居りて平
田家継と我ひ及ん中て絶て時年七十二没後の堂あり息又人終り於朝
衛護して朝野の功を建しむ五子の徳人の知る所あり居り

○鎌倉源氏の和代より三十六人の國衆十二人の御侍あり居り氏卿の御二國巻
佐渡判友道譽 曰くま判官氏於屬と此時には及二ツ又別して豊智川
より南を江南佐々木六角といひて赤綱とこれを絶と北佐々木系格と
いひて高氏これを絶とる氏は道譽の弟なりと定綱五子の孫といひても
左衛門尉檢非違使の任よりて道譽は系師系格も位と赤綱は六角も
遷るれより孫の氏よりて系格は六角と稱とて近江の守護とて居り
仁の次は高朝文憲の次は氏綱永正の次は定朝弘治の次は義賢又天
正は義朝と續てこれを官位職といひ又絶とも云

○佐々木高氏

佐々木高氏 佐々木高氏といふ小系高氏と共り別發して道譽と云ふの
後醍醐帝を後醍醐(遷)なる外道譽を供奉せり其時が治平日々に
起過るとして竊り是利尊氏を獎して遂にこれより赤綱は相根の軍に赤松
と我ひ竹のたけく官軍と破るに平三年高師直は後して捕正約とに系願も
政るに約我死と其後義詮は後ひ系師をもちて官軍と率ふ又敵陣
八相山の險難に進みと義と奮戦して大に破る其後又義詮は後ひ系師と
守るに七多此系後軍功多く二心と不懐して義詮遂に征夷將軍と稱せり
る宛るは道譽其功を誇りて驕奢日々に盛んるれが一時の武人人の田園とを奪ふ
る事付たるを義朝命じて妙法院の相の枝とわくむ此狼籍より起りて朝
宮院を焼くは院衆を悉く捕ふ親王踐踏して僅に脱と居ると息考
綱かゝるも近よりて捕せられこれに因て道譽と交んと山僧日吉の興と振
て切に敬奏とる氏止りてをゆくとと総國に流罪と此に抑ひて道譽は傍の澄
奏を憐れり國を後とるふ及んで多くの孫とて其はをて兵又夜を
うさり三百人斗をうさるるを携りて中止宿とる系毎は妓婦を集り
飲樂し獅も思ふるは後かく殺されて近江に還りて五十三人の衆とてこれに
死の下の舎は僅と小し綿綿又虎豹の皮を座し五尺四方の盤を肴果を
登り猪をて葦瓜園しや金香衣裳糧かぐま刀のたぐひをそり主人

又其ののち又増妓を致すをとりて遂に博愛して一度は教を其を
納し其の家毎に不焼の幡を流し流しを創して門僧の俸禄を充てて
と之を納し居るの二年より卒を卒六十八の三人を秀綱秀定
秀秀本高秀家終に終は是系極家の元祖之官武功を秀綱の法院と
拂ひ一職をすくんと豊田の郷兵これを行らるす

○ 佐々木氏頼

泰綱が孫に建武三年尊氏及び附氏於十歳少
親音の場は後後五年年中為氏忠義と兵を構ふ附氏於西山の傍に遊
て薙髪し崇永と改む此後軍功多し又磨山より神興を振る小に紀
一宮を凡に弘への附後光嚴院氏に命じて拒がむ因て殺十人を殺し帝
書の褒美を給ふ延徳元年又卒を又義信又興して足利義満の牙満高
を養ふて又その近江の守護なり是を六角とす

○ 浅井氏

系後之徳官其先後花園院嘉吉年中三條大納言公綱後改勅勤と豊
く尤遷せられて佐々木系後中務少輔持法と改らる三條家の御知事と
浅井郡丁村に養老と実うて一人を生む此子三歳の附勅勤免され浅井
て兵後豊と其子孫ありて丁野村に成育して十歳に附持法を野みゆる
是を遂て自我に丁野村流人の子と申すは其母をく親ひこれ持法と
こは押しども公卿の子かれとて別は即其名を名のせ即其の里を合カせり

浅井新治郎重政後新在東のと名の其一人あり新三郎忠政と云其子三人あり
嫡男新治郎賢政二男新十郎是三田村の家の後三男新八郎是大野本の本
とある嫡賢政三子あり一は新三郎教政後赤尾後其子孫の二男亮政後
かれども上坂の城今浅の城系より強大の城ありて亮政は男あり嫡子
新三郎高政は二男新九郎久政後其子孫三男官内少輔に男僧と智山和尚といふ
二男之政の子は新九郎長政後其子孫是近代の武勇ありて信長妹婿とあり一は方極
九とあり後終は信長と戦ひ長政は極丸共は小谷の城に拠ひて自害す

○ 蒲生家

先祖は儀長を秀郷の二男と時六代の後惟後平家の以興より上
まゝに及蒲生郡と揚を蒲生を即といふ日村教養羽は城に築き其子蒲生
後賢は新郷と云ふがひく一家探留及後後七代の孫蒲生秀郷より六代
末孫蒲生貞秀ありて和閑法師とあり息三人あり嫡男を蒲生秀郷といふ
將軍義隆と云はく早世と其子後兵衛尉秀紀壯年にして自害す秀郷の弟
左衛門右兵衛高卿の嫡男定秀は日村の徳武を承る其嫡蒲生後兵衛賢秀は
右佐々木義賢に属し後織田信長卿は法賢秀の子鶴と代信長卿の婿と
て蒲生忠三郎氏卿と改めて中比伊勢松坂の城を治め後豊臣秀吉公に属し
て奥の會津百万石を領し飛騨守氏卿と云秀吉は神の蒲生の女を娶り
織田信長公 天正九年尚國安城を築て住り神て是より五重の天守を築

石垣上の度と南五十間とを造営し、天正十年六月十日明
智丸馬女を度と名を今又肥前諸候を夫の家後路あり後より寺と
掘見寺とを院と名に織田家の庶子を令て今又志より。信長其先平相國
法皇より二十一代の孫元曆中平氏の一族悉くを討つて重盛の二男資盛一
を重盛と抱せ、苗國津田の御は法と資盛其苗一首の孫を添より

道にたり津田の入口の邊つゝ、見えぬと油を添よりたり
後法皇を以て後簡の院と名をかくて妻其子資盛を俵よりたりて終る津田の
長の妻と名を家又織田家の庄の神主天下津田津の巻敷と稱るは、
經て入系と名を津田の長を宿と名を固て彼資盛の子を乞うて妻と
後津田田檢を親真と名を織田の先祖と名を織田の社の神職よりし
後織田の守津武衛義將彼神職の裔を以て六奉紗の二人孫よりし、
これよりより尾乃と名を再び武門の惣圖といふより後、信長織田國
を討つ織田の神社を修造し、又安土と城を築き、そのゆへあり。○信長を
織田彈正忠信秀吉と名を以て童名を吉法師殿と名を三年午又月廿八日
誕生月十八年十三日、右津田の城を以て三郎信長と稱し、十四日
始めて三郎吉良大漢の軍に從ふ十八日、後山城入る道三の女と娶
十六歳より上総女と稱し、永祿十一年軍功のありて、將軍義昭より感状并

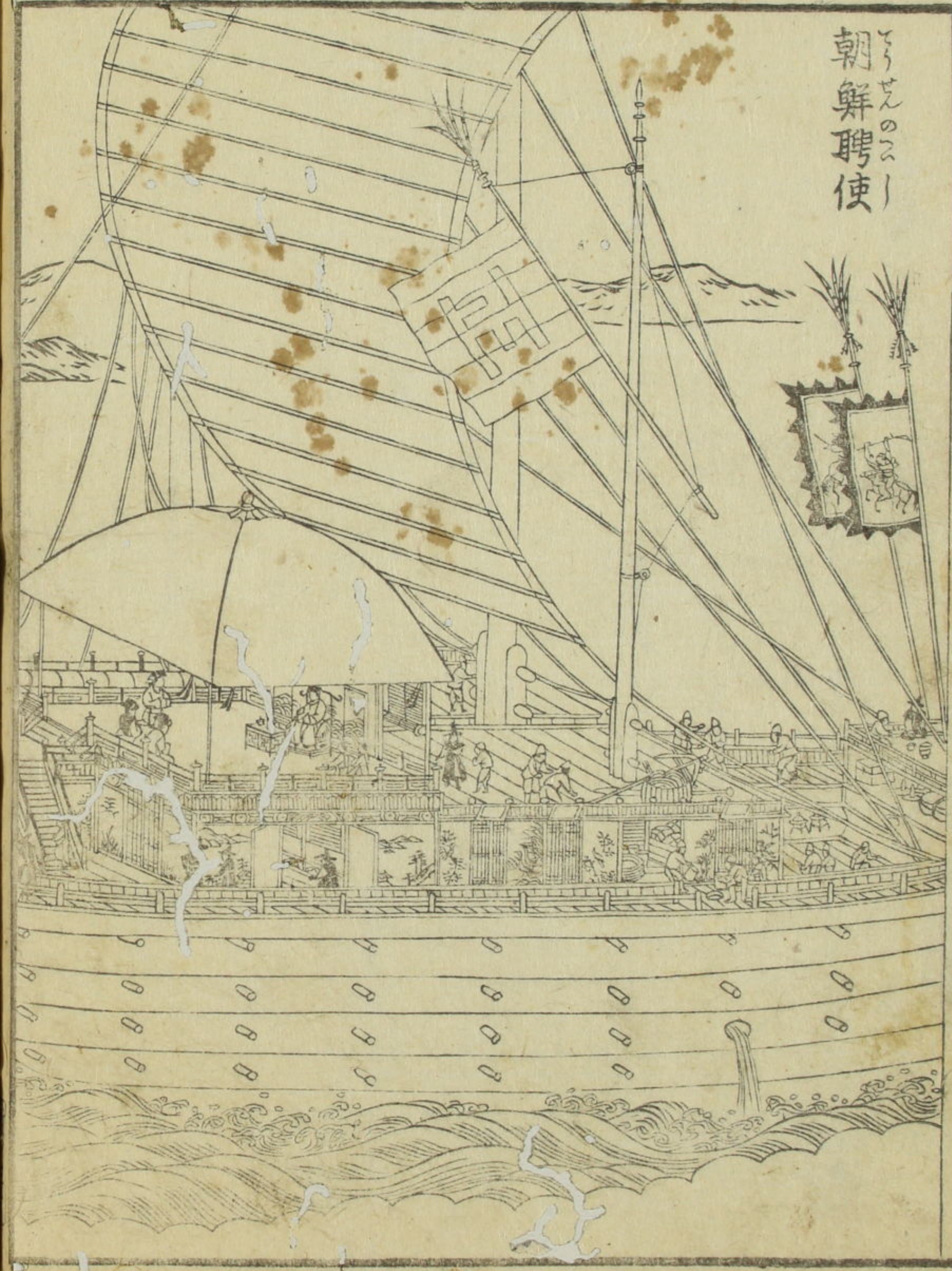
○大岡赤方吉公

信長の時、江の守津、不と小谷の城小勢にて守難し
と、城今漢みより、以て長漢と名を此節、江は未靜なる系、檢を
御を以て一人、若狹守高次一人、丹波、此後、道に平均と名を長二年十二
月、江の右、秀吉の仰より、悉く破却せ
○其先、江は漢丹郡山門の僧侶、後還俗して尾張國豐智郡中村、僧若
圓若と名を其子吉高侍といふ、其子吉高、中村、孫女、
秀吉、其子、孫、又、死して其妻、その子を以て、信長の日、朋、
婦、一、男、一、女、を、生、む、一、男、大、和、大、納、言、吉、長、初、名、小、笠、と、一、女、三、好、武
義、二、位、法、印、一、路、を、妻、と、名、を、○秀吉、名、と、日、吉、九、と、名、後、遠、松
下、加、志、清、尉、之、綱、と、名、を、膽、大、と、名、勇、才、あり、不、平、あり、尾、乃、と、名、信、長
又、仕、本、下、後、若、郎、と、名、を、武、田、勝、家、丹、羽、長、宗、が、苗、字、の、一
字、と、名、を、羽、柴、院、守、と、名、を、天、正、十、年、主、人、信、長、の、仇、を、討、其、功、を、
て、お、お、任、を、任、り、月、を、追、て、海、一、帯、一、船、解、大、明、も、も、切、な、ひ、は、



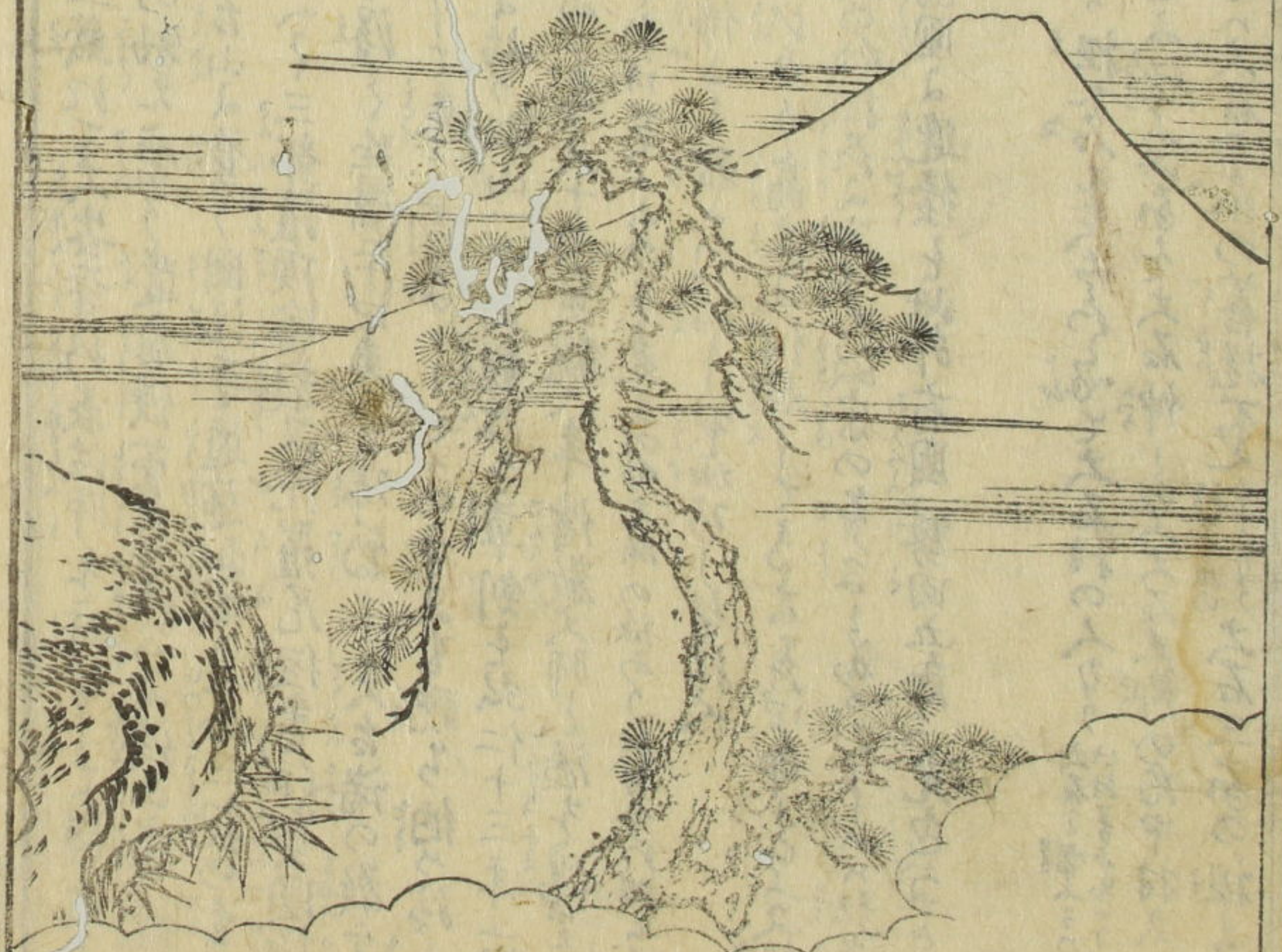
大國のまじり仁徳
 三韓の王又
 唐土の海門より
 ももりけき浪俗
 をもけて我國に
 入夏とらん作功
 皇居のあつ
 の所例く

朝鮮聘使



孝子元政

身延紀行
久の徳田まをとのふみ
柳壺の奉納と申らん
抄なくさうりて宿も
ありとふへ金巻
伯敷累々入面土の
あつらふの御流の
あつらふをりてよ
ゆねのふとん
とらやとん
わら其
そんとん
あつらふ
あつらふの白雷
あつらふの白雷
あつらふの白雷
あつらふの白雷



附註

つとこう
うくぬね



原辰吉秀卿よりして子種の子孫を武郡小園の初りて子種感綱が縁といふは
 獅子殿の國をとりて治養の首源三位朝政が當を拒む此不を今國の
 津といふ石の南之是男石三卿の入口之又男石の邊といふ獅子殿の南之邊
 又大石の邊に渡七郎良遠住といふ子種が末之嫡家を大石三郎を清といふ
 橋谷と神藏と二男を仲といふ是又石良雄等が祖と三男を朝といふ一男と
 是も清神殿の仕といふ將軍義勝卿持本台へ所移の附大石三卿の諸事を
 けて供奉せり天文の一乳といふ大石當討死して子孫之感と附小山合といふ
 といふ石合といふ稱し其後分て久合といふ子兒といふ石の雲良といふ其
 子と内務外良昭と乳母良等といふ其子持内良直といふ其子内務外良雄
 久右の雲良が弟の平右の良持其子といふ又美良持其子三郎良直といふ
 兩家といふ後世家といふ此流今系師よ持里又仲辰辰等といふ今も
 本卿大石にもあり

○僧元政 母石の産之文の道經洛陽の人元政姓は菅原氏石良元和九
 末受美二月廿三日洛の平家よ生る小字を後といふ後兼聽明善通の假子
 又思之六歳にして秘て書と讀兄元秀といふ小名根の端の中が身修を考ふ
 事の後八歳にして武を考ふの考へ學ぶ十三歳直考振く左右の侍せりといふ



